

● シリーズ 私の見た日本 Vol.221

## 日本と中国の公共空間の観察 歩道から生まれた空間演出

沈思浩 (シン シコウ)



中国江西省新余市生まれ。  
2023年京都精華大学デザイン  
学部建築コース卒業、同  
年同大学デザイン研究科建  
築専攻に進学、現在在学中。

### 日本に来る前の印象

私は子供の頃に北京五輪や上海万博など国際的なイベントが開かれ、日本のアニメやマンガのような様々な国の文化を知ることができた。日本に留学を決めたのは、その文化に興味があったことと、同じアジア圏の国同士での文化の共通点と違いを探求したいと考えたからだ。

日本へ来る前に、日本のことを聞いたり、調べたりしていた。その中でよく耳にしたのは、日本の街が綺麗だということだ。実際に、澄み切った空と風に揺れる木々が私にとって日本の最初の印象だった。

### 日本に来た後の印象

来日後、日本の何もかもが新鮮だった。新しいこと、新しい人、新しい言語を頭の中いっぱい詰め込んでいた。新しい環境に来ると、それまで当たり前と思っていたことは当たり前ではなくなり、新たなルールやマナーを自ら観察し、学ばなければならぬと気づき、精いっぱい慣れるように生活していた。

慣れていくと、中国と日本の違和感を少しずつ感じるようになった。キーワードは「距離感」だ。電車に乗って学校へ通っていた時に、みんなが微妙な間隔を空けて座ったり、あるいは空いているスペースがあっても少しでも足りないと思えば立っている場合が多いことに気が付いた。列に並んでいる時も微妙に間隔を空けて並んでいる。一方、中国にいると

きは隣の席に人が座ったり、話しかけられたりすることは普通だ。

また、街と人も微妙な距離をとっていると感じた。日本の街はきれいで、地面は整備され、緑も管理されている。お店の前も整えられている。しかし、何か違和感を感じた。何か一味が足りないように思ったのだ(写真1)。

### 日本と中国の歩道(公共空間)の観察

歩道は公共空間であり、車道ではないから、人が留まり活動できる場所だ。

中国にいる時に私はいつも歩道の様子に注目し、日々どのような空間演出が行われているのかを期待しながら歩いている。路上観察により、その街の全貌が分かってくる。歩道にはさまざまな店が並び、さまざまな活動が行われている。靴磨き屋さんや食事屋さんなどももちろん並んでいるし、お店の外へテーブルをはみ出して置く店も少なくない(写真2、3)。この写真は広州番禺黄编迎富街に撮った写真だ。その日は雨だったので、お店は歩道にテントを置いて商売をしていた(晴れの日にはテーブルと椅子を置いている)。この風景が私としては日常だった。毎日学校が終わって帰ると、ちょうど道の両側の店の人々がこのような風景を作り始める時刻だった。

日本では、特定のイベントが行われるとき、歩道に屋台や露店が立ち並び光景が一般的だと思う。これは非日常的な風景として捉えられるだろう。例えば祇園祭で、祭りの期間中

は車両の通行が制限され、道路は一時的に歩行者専用となり、歩道に屋台や露店が立ち並び、食べ物や飲み物、お土産などが販売され、歩きながら楽しむことができ、歩道は祭りの一部として活用される。

また弘法市では、東寺の境内や周辺に多くの屋台や店が立ち並んでいて、このようなイベントでは、歩道が中心的な場所として活用される(写真4)。これらのイベントや特別な行事がある際には、交通制限が行われ、歩道と車道の使い方が変わり、参加者は屋台や露店を巡りながら、地元の文化を楽しむことができる。

このような場合では、歩道が一時的に非日常的な空間として活用され、特別な空間演出を提供する。

### 歩道空間の流用性

近年の中国の都市の歩道では、安全性と衛生面に関する規制が強化されてきているが、過去にはタイヤがついた屋台を押しながら販売する光景もあった。しかし、現在ではそうした屋台は「歩道空間の不法占拠」に指定され、撤去されることがある。

あるいは、決められた時間帯と場所で屋台での販売のみという場合もある(写真5)。このように歩道の利用を円滑にするために行われる規制の強化は日本でも少なくないと思う。その代表的な例が、福岡の博多屋台だ。

博多屋台は、福岡市博多区を中心に、夜に



左上/写真4 弘法市の風景 右上/写真5 中国海南省の街の風景  
左下/写真6 大阪の天神橋 中下/写真7 屋外に置かれたテーブル 右下/モノが溢れる街

なると博多の繁華街や駅周辺などで色鮮やかな提灯や暖簾が目立つ屋台が立ち並び、地元の人々や観光客で賑わうのが特長だ。博多屋台は福岡の風物詩の一つとして親しまれ、地元の文化や食文化を象徴する存在となっている。地元の魚介類や野菜、博多ラーメンなどの郷土料理が提供され、新鮮で美味しい食事を楽しめる。また、焼き鳥や串揚げ、もつ鍋など、福岡の屋台ならではの料理も豊富に取り揃えられている。観光客だけでなく地元の人々にも親しまれていて、地域の交流やコミュニケーションの場としても重要な役割を果たしている。

もう一つ思い出すのが大阪の天神橋だ。屋台の形ではなく、両側に店が並び、お店の周囲にはテーブルや椅子などが置かれ、ビニルシートで外側を囲んでいる。ここでは、地元の人々や観光客が仕事や家族、友人との会話を楽しみながら食事をする姿が見られ、賑やかな雰囲気が漂っている。

天神橋のこのような雰囲気は、大阪の屋外飲食文化の一環として知られている。両側に店が立ち並び、通行人が外で食事を楽しむ様子は、大阪の街全体に生き生きと広がっている(写真6、7)。

### まとめ

いつも街を歩いていて見掛ける、店舗の前の植物、マーケットの前に置かれた人気商品、蚤の市やフリーマーケットなどでシート一枚を敷いて人が集まる様子は、活気に満ちた街の風景の一部として魅力的だ。生活を感じる街並みは、家々の物理的な連続を越えた、社会的存在としての町を連想させる。

まちづくりは研究内容として取り込もうとすると、とても規模が大きく、把握するのも難しいので、手詰まりに感じることも少なくはない。その時はただ止まるよりとりあえず動こうという気持ちで家を出て散歩をし、その街に関わる様々な物語やエピソードを見つけている。この街でどんな物語があるのか、もし私

が初めてこの街に来た時に何が良かったのかと、そんな小さなストーリーから大きなまちづくりのプロジェクトへ発展していく過程は、私にとってとても魅力的だ。

デザインはものを生活の中に、そして人の行為に溶け込ませるということだ。建築も同じだと思うので、個人の営みや日々の暮らしに使われているモノが外側にあふれると、街との距離は短く感じられる。人と街の関係性が絶している個々の存在感ではなく、むしろ寄り添い合って生きている関係と言っても過言ではないと考えている。都市空間は、その中で暮らす人々の活動や行動によって形成され、同時に人々の生活や行動も都市の構造や環境に影響を与える。

街が人々の生活や活動を受け入れ、人々が街を生きる場として感じることができるよう生き生きとした風景となることを願っている。



左/写真1 日本の街 中/写真2 中国広州番禺黄编迎富街 右/写真3 中国広州の街の風景